

# 復興の象徴 大島架橋 災害に強く維持管理性高く

宮城県  
土木部

## 津波関連データ活用

土木研究所 星隈順一氏

この観点から重要視して、構造計画の検討が進められた。

特に、橋の損傷や維持管理に関するこれまでの

今回の設計検討では、検討の各段階において常に大島架橋に求められる要求性能を念頭に置き、災害に強く、耐久性に優れ、維持管理しやすいと



管理に関するこれまでの様々な経験と教訓、さらには平成23年東北地方太平洋沖地震での津波に関するデータ等が、構造計画の検討プロセスの至る所で活かされているという点が最大の特徴だ。耐震性能という観点か

て、その部位へのアプローチの仕方と併せて点検マニュアルに反映する等の配慮もなされている。本橋における構造計画の検討プロセスは、これから新設する他の橋にも大いに参考になると考えられる。

本橋の構造計画の基本理念が、維持管理の段階に適切に引き継がれ、また災害時には緊急輸送路としての機能を果たしながら、本橋が長く愛される橋となることを期待している。

維持管理の重視は、これまでの橋梁の構造設計においても当然目指して



## 考え方、方法論に意義

土木研究所 村越 潤氏

きており、新しい取組みではないが、構造設計の早い段階から、経済性等の総合的な評価を行うつ、具体的に反映させるための考え方や方法の議論が行われたことに設計検討委員会の意義があったと考える。

本橋の場合、例えば、橋梁各部の点検等に関しては、点検員や点検車による点検方法、それに適した構造や点検施設の配置など、詳細な検討が行

われた。また、将来の腐食等劣化損傷が懸念されるケーブルについては、交換や損傷時に構造上弱点とならないようにリダンションも踏まえて、ケーブル設計の検討が行われた。

維持管理を考慮した構造設計については方法論が確立されているわけではなく、個々の橋梁の様々な前提条件の下での具体的な検討が必要となる。こうした検討の積み重ねが方法論の構築に重要と考えられる。